

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 18 日現在

機関番号：24102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380688

研究課題名(和文) 精神障害者の当事者研究場面の相互行為的構造：エスノメソドロロジーによる解明

研究課題名(英文) An ethnomethodological analysis of interactional structure of Tojisha-Kenkyu practice

研究代表者

浦野 茂 (Urano, Shigeru)

三重県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号：80347830

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、精神障害者の当事者研究場면을収録し、エスノメソドロロジーの手法によって分析することにより、その相互行為的構造と精神障害者にとっての意義とを明らかにすることである。この結果、次が明らかになった。(1)当事者研究とは、障害をもつ当事者たちがその困難経験を言語として表現することを通じ、その構造を共同的に研究する実践である。(2)しかし、その道徳的含意ゆえにこうした困難経験の言語化は困難であること。(3)この困難に対処すべく当事者研究の実践は、(a)発言順番の組織方法と、(b)話者と経験の主体との関係づけについて、独自の組織方法を採用していること。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to explicate the interactional structures that consist of practices of Tojisha-Kenkyu (i.e. first-person study) through ethnomethodological analysis of the recorded data. The result of the research are as follows: (1) Tojisha-Kenkyu is one kind of practices that aims to collaboratively study structures of difficulties people with mental disabilities have by themselves. (2) However, because of various moral implications that accompany experiences of difficulties related to mental disabilities, it is problematic for participants to tell their own troubled experiences to others. (3) As ways to deal with these problematics, we can find in the interactions of Tojisha-Kenkyu session two ways related to organizing interactions; (a) The way to organize turn-taking in which each utterance is made, (b) The way to align speakers and listeners to the troubled past experiences that speakers are telling.

研究分野：医療社会学・障害学

キーワード：エスノメソドロロジー 当事者研究 精神障害 語り 相互行為

1. 研究開始当初の背景

(1)精神障害者の生活上の困難の多くは、脳や神経あるいは心理といった障害当事者の内側にある事情そのものに由来するのではなく、むしろ当事者を取り囲む社会生活のあり方の問題に由来するものであること、このことがこれまで数多く指摘されてきた。こうした指摘を踏まえるならば、専門的治療者によってなされる社会適応を目的とする治療的働きかけは、当事者への支援として不可欠ではあるもののそれだけで十全なものと考えすることはできない。むしろこうした治療的働きかけは、当事者に困難をもたらしている周囲の社会関係に目を向け、これを改めていく方法によって補われる必要がある。そしてそのために必要となるのが、実際にその社会生活のなかで困難を経験している精神障害当事者自身の言葉である。その生活のいかなる点について、いかなる理由で困難を経験しているのか。これを言葉にすることにより、当事者の抱える困難に対して当事者と周囲の支援者とが連携して向かいあうことが可能になる。ここに精神障害者の当事者研究の実践が注目されている理由がある。

(2)本研究を開始した当初、当事者研究の実践をめぐる研究状況は次の通りだった。(a)当事者研究の実践報告(浦河べてるの家, 2005; 綾屋・熊谷, 2008)。これは当事者研究の成果の紹介と、紙上における当事者研究の実践である。(b)当事者研究についての哲学的研究(石原, 2013)。これは当事者研究の社会的・哲学的意義を論じたメタ研究である。こうしたなかで、当事者研究について、その実践の収録データにもとづきながら分析的に解明する作業は、ほぼ手つかずの状態にあった。この点を踏まえて本研究を開始した。

2. 研究の目的

当事者研究は、精神障害をはじめ様々な困難経験をもつ人々がその経験を言語化し、これに主体的に対処するための協同的实践として、その意義が注目されている。本研究の目的は、こうした精神障害者の当事者研究場면을収録し、エスノメソドロジーの手法によって分析することにより、その相互行為的構造と障害当事者にとっての意義とを明らかにすることである。すなわち、当事者研究の実践がその発祥時より維持している理念が、いかなる相互行為の組織方法を通じて実現されているのか解明することが、本研究の具体的な目的である。

3. 研究の方法

当事者研究がその発祥時より維持してきた理念は、その具体的な実践においていかなる相互行為の組織方法によって実現されて

いるのか。この点を明らかにする目的で、本研究はおもに二つの調査を実施した。

(1)当事者研究の理念についての把握。これは、浦河べてるの家と向谷地生良によって刊行されている当事者研究の解説書と浦河べてるの家の見学を通じて実施した。

(2)当事者研究の実践についての参与観察と収録を通じての相互行為的構造の解明。これは、ある公立精神科病院の生活支援室において実施されている当事者研究の場면을対象とし、病院と参加者の同意のもとに参与観察と収録を行った(全10回分の収録)。この資料にもとづき、当事者研究の実践において用いられている相互行為の組織方法の分析的解明をおこなった。

4. 研究成果

(1)精神障害者の自助活動においてその困難経験を言語化することの意義がこれまでに数多く指摘されてきた。これを踏まえ、本研究はその意義の根拠として次の点を明らかにした。困難経験の言語化には、困難経験にそなわる経験者の知識を、専門的知識による症状化に先立って存在する独自の現象として明示化する意義がある(浦野, 2014; 2016, 中村・海老田, 2016)。

(2)当事者研究は、困難経験の言語化を支える様々な相互行為的技法のひとつである。この技法の解明に先立ち、本研究はこれらの技法が対処すべき課題を明らかにした。それはつぎの通りである。

経験の語りの定義的特徴は、経験の主体と語り手との同一性にある。このため自己の経験を語る場合、その経験に対する評価がその経験の主体だけでなく語り手自身にも帰属されうる。このことが、一方において語り手をしてその困難経験を語ることを差し控えさせ、他方において受け手をして共感的反応を超えてその経験を検討することを差し控えさせる。こうした可能性が、困難経験の言語化とそれを協同で検討する当事者研究の実践にとって対処すべき課題となる(浦野, 2016)。

(3)当事者研究場面の収録データの分析にもとづくと、困難経験の言語化に備わる上記の課題に対し当事者研究の実践は次のような相互行為的技法を開発してきたと考えることができる(浦野, 2016)。それはつぎの通りである。

(a)発言順番の組織方法を通じ、語りに対する参加者の反応を無関連化すること(浦野 2017)。これを実現するための方法として、「言いつばなし聞きつばなし」の実践がある。これは、アルコール依存者の自助グループ AA (アルコール依存者の匿名の会)に由来する

と言われるミーティングの手法である。

(b)経験の語りにおいて想定される語り手と、語られる経験の主体との同一性を切り離すこと。これを実現するための方法として、心的状態を公的対象になぞらえて語る方法がある。具体的には、自己病名(医学的診断名でなく、当事者自身による問題の定式化)や擬人化(一人称現在の心理文の、擬人化を用いて三人称の文へと変換すること)を用いることで、語られる経験に対する語り手と受け手との参与構造を変更する方法がある(Urano et al., 2016)。

これらの技法を用いることにより、当事者研究は、参加者の困難経験の言語化を促進し、この経験についての協同的理解・解明を試みていると考えることができる。

【参考文献】

- 綾屋紗月・熊谷晋一郎, 2008, 『発達障害当事者研究』医学書院。
石原孝二(編), 2013, 『当事者研究の研究』医学書院。
中村和生・海老田大五郎, 2016, 「保健医療の実践のエスノメソドロロジー & 会話分析研究—録音・録画メディアの利用と臨床への介入的貢献」『保健医療社会学論集』27(1), 51-61。
浦河べてるの家, 2005, 『べてるの家の「当事者研究」』医学書院。
浦野 茂, 2014, 「保健医療分野におけるエスノメソドロロジー—診断をめぐるいくつかの論点について」『保健医療社会学論集』25(1), 10-16。
浦野 茂, 2016, 「当事者研究の社会秩序について—経験の共同研究実践のエスノメソドロロジーに向けて」『保健医療社会学論集』27(1), 18-27。
浦野 茂, 2017, 「「言いつばなし聞きつばなし」のエスノメソドロロジー」『臨床心理学』17(増刊号)。
Urano, S., Mizukawa, Y. & Nakamura, K., 2016, “Creating “idiom of distress” collaboratively: An analysis of practices of self-directed research by people with mental illness,” 3rd ISA Forum of Sociology, July 11, 2016, University of Vienna, Austria.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

浦野 茂, 2014, 「保健医療分野におけるエスノメソドロロジー—診断をめぐるいくつかの論点について」『保健医療社会学論集』

25(1), 10-16.

DOI : 10.18919/jshms.25.1_10

浦野 茂, 2016, 「当事者研究の社会秩序について—経験の共同研究実践のエスノメソドロロジーに向けて」『保健医療社会学論集』27(1), 18-27, 査読あり。

DOI : 10.18918/jshms.27.1_18

中村和生・海老田大五郎, 2016, 「保健医療の実践のエスノメソドロロジー & 会話分析研究—録音・録画メディアの利用と臨床への介入的貢献」『保健医療社会学論集』27(1), 51-61, 査読あり。

DOI : 10.18918/jshms.27.1-51

中村和生, 2017, 「ポスト分析的エスノメソドロロジー、あるいは概念分析」『現代思想』45(6), 112-124.

浦野 茂, 2017, 「「言いつばなし聞きつばなし」のエスノメソドロロジー」『臨床心理学』17(増刊号), 印刷中。

〔学会発表〕(計6件)

Urano, S., Nakamura, K., & Mizukawa, Y., “Accomplishing understanding via analogy: An analysis of practices of self-directed research by people with mental disabilities,” Atypical Interaction Conference, University of Southern Denmark, July 3, 2016, Odense, Denmark.

Nakamura, K., Urano, S. & Mizukawa, Y., “Being facilitator and co-member in a tojisha kenkyu session of people with mental disabilities,” Atypical Interaction Conference, University of Southern Denmark, July 3, 2016, Odense, Denmark.

Urano, S., Mizukawa, Y. & Nakamura, K., “Creating “idiom of distress” collaboratively: An analysis of practices of self-directed research by people with mental illness,” 3rd ISA Forum of Sociology, July 11, 2016, University of Vienna, Austria.

Mizukawa, Y., Urano, S., and Nakamura, K., “Tojisha/peer membership categories and sequential order in tojisha kenkyu sessions for people with mental illness,” 3rd ISA Forum of Sociology, July 12, 2016, University of Vienna, Austria.

藤居裕昭とこころの仲間たち(藤居裕昭・村田萌絵・三好哲也・河合晶子・浦野 茂), 「空のリュックサック病の研究」, 第13回当事者研究全国交流集会, 2016年10月9日, 大阪大学豊中キャンパス

Mizukawa, Y., Urano, S. & Nakamura, K., “Membership categorization and sequential use of language in tojisha kenkyu (or self-directed research) sessions for mental health,” International Association of Pragmatics Conference 2007, July16-21, Belfast Waterfront Center, The United Kingdom.

〔図書〕(計2件)

浦野 茂, 2016, 「「神経多様性の戦術—自伝における脳と神経」, 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生・小宮友根(編)『概念分析の社会学 2—実践の社会的論理』, ナカニシヤ出版, 7-26.

中村和生・森一平・五十嵐素子, 2016, 「素朴心理学から Doing sociology へ—記述の下での理解と動機のレリヴァンス」, 酒井泰斗・浦野 茂・前田泰樹・中村和生・小宮友根(編)『概念分析の社会学 2—実践の社会的論理』, ナカニシヤ出版, 154-172.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浦野 茂 (SHIGERU URANO)
三重県立看護大学・看護学部・教授
研究者番号: 80347830

(2) 研究分担者

水川喜文 (YOSHIFUMI MIZUKAWA)
北星学園大学・社会福祉学部・教授
研究者番号: 202999738
中村和生 (KAZUO NAKAMURA)
青森大学・社会学部・准教授
研究者番号: 70584879

(3) 連携研究者

船越明子 (AKIKO FUNAKOSHI)
兵庫県立大学・看護学部・准教授
研究者番号: 20516041

(4) 研究協力者

三好哲也 (TETSUYA MIYOSHI)
三重県立こころの医療センター
河合晶子 (AKIKO KAWAI)
三重県立こころの医療センター
藤居裕昭 (HIROAKI FUJII)
三重県立こころの医療センター
村田萌絵 (MEBAE MURATA)
三重県立こころの医療センター